掌篇集『千字一夜物語』

吉川楡井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
掌篇集『千字一夜物語』

【Ｎコード】
Ｎ８０４５Ｉ

【作者名】
吉川楡井

【あらすじ】
千字の言の葉　千度の念　刻まれたるは千年の時
窓を開けば現れし　今宵紐解く一夜の連は
夜も夜とて眩く照らす　語り継がれし物語
―――千字で綴る、夜伽話の数々。

序言

語り継がれし物語

夜は夜とて身が震え　星は星とて瞬けど
夜に棲まいし人々の　思いの丈は身を焦がす
怒り　悲しみ　数あれど　　憂い　霞みも数あれど
千字の言の葉　千度の念　刻まれたるは千年の時

蒼い砂漠の夜――。
北国の月満ちる夜――。
草木も眠る丑三つ刻の夜――。
星が瞬く祭りの夜――。
スチームガスの覆う、白夜の夜――。
空は晴れて、かの天体が麗しく輝く夜――。
潮風の靡く、愛しきひとの末期の夜――。
星の尾が糸雨の様に降り頻る夜――。
波は穏やかな浜辺の夜――。
観客のいない劇場の夜――。
警笛が谺する摩天楼の夜――。
柱時計の音が鳴り止まぬ、混沌の夜――。
ひとりぼっちの公園の夜――。
鐘楼の泣き咽ぶ夜――。
悩める数学教師の夜――。

窓を開けば現れし　今宵紐解く一夜の連は
夜も夜とて眩く照らす　語り継がれし物語

第一夜『蒼の帳』（前書き）

砂の灼けつく昼間から　風の吹きつく夜闇へ／
業火の後に撫でる風　宝石奪い去り行く風に／
貴方は何故に目を瞑る

第一夜『蒼の帳』

第一夜『蒼の帳』

蒼い砂漠の夜――。

砂嵐は止んだようで、多少の埃が宙を舞う中、月光は綺羅燦々と降り注いでいる。光の雫は透き通り、寝室の窓と緞帳を輝かせている。貴方は安楽椅子を揺籠のように弄びながら、月の砂漠が眠る様子を眺めてはその蒼さに沈黙を続けている。宴は終わり、侍女が夢見に時間を費やす頃、宮殿の広間を含めて、至る場所に夜の帳が下りている。踊り子の舞いも、官能的な音楽も、卓上に並べられた異国の料理の持て成しも、果実の盛り合わせも、祝盃の杯も、列を成す燭台の灯も、全て片付けられて、装飾燈（シャンデリア）は硝子の僅かな反射光だけを発している。

久方振りの宴にさぞ疲れたことでしょう――。寝台を整えているわたくしの言葉に貴方はただただ呻くばかりで、安楽椅子の軋む音だけが寝室には響いている。

東の太陽の国の王様が酔いに乗じて発した言葉を貴方はまだ気にしているのでしょう。酒精は恐ろしきもの、人間誰もがそれを飲み干せば立ちどころに嘘がつけなくなる。まるで鎖を解かれた囚人のように、自由を手に入れたと勘違いをして暴れ回るのです。

貴方は片目を瞑って、わたくしの話を聞き逃さない為にじっと耳を澄している。肘掛けに乗せられた指先が震えている。怒りも酒精と同じ。我を忘れてしまう。貴方はそれ以上耳を貸さずに、窓外の光景を睨み続ける。

わたくしにも蒼く見えます。夜の闇は全てを黒く染めても、星たちが清透な蒼に調和させてしまうのです。一時の蒼、永遠の蒼に。貴方の帰還に宮殿の者たちは皆喜んでいるではないですか。皆が貴方の帰りを待っていたのです。たとえ命が亡くなろうとも帰って来

てくれれば良かった。貴方が今そうして無事に戦争から帰って来たのですから、苦しむ必要なんてないのです。多少の傷が疼こうとも、貴方は立派に戦争に打ち勝って来たのです。

安楽椅子から立ち上がり、窓辺に歩み寄った貴方は両手をついて、降り注ぐ星月夜の光を浴びる。わたくしの目にも今の貴方の体は蒼く輝いて見えます。わたくしの言葉は貴方への慰めにすらならないけれど、それが事実。東の太陽の国の王様は、貴方を西洋人形と嘲って呼んだけれど、それは貴方の勇姿の証。

貴方は髪をかき上げ、左目に触れる。爆弾の熱と光で失ったものの代わりに、埋め込まれたアクエリアス・サファイアの瞳。

悲しまないで。

夜だけならば、わたくしも貴方が永劫見続ける蒼の世界を共有出来るのだから。

第二夜『月とロミオ』（前書き）

雪原に差す月影よ　大地を駆ける兵隊よ／
光の靡く冬空に　互いの眼差し武器にして／
激しき鼓動を夜に散らせ

第二夜『月とロミオ』

第二夜『月とロミオ』

北国の月満ちる夜――。

貴方は白く濁らせた息を振り撒いて、暗い森を走っている。貴方を見下ろす視線にも気付かずに、風のように木々をすり抜け、四肢で大地を蹴る。

貴方の双眸は既に血走っていて、理性を失っている。貴方をそこまで疾走に駆らせるものは何なのか。貴方は分かりきっていることだとどうせ声を荒げるのでしょうけど、貴方こそ本当はその怒りを何処にぶつければ良いのか分かっていない。

木々が途絶え、景色が開ける小高い丘に貴方は現われる。貴方は鋭い眼光で、円い月の輪郭に怒りの視線を突き刺す。風は吹き荒び、木々は揺れる。貴方の毛並みも僅かに揺れる。　貴方の知らないことを教えてあげる。これは決して叶わぬ恋。

貴方が夜々この丘に来て、怒りに想いをたぎらせているように、情熱の思いを燻らせているものがいることにどうか気付いて。

夜だけのランデブー。それは貴方に怒りを思い出させてしまうけど、昼間の邂逅は禁断の行為。可能であれば貴方がまだ怒りを忘れている内に逢いたいけれど、それは叶わない。更に貴方を怒らせてしまう。

貴方は丘の上で震える肩を落ち着かせようと歯を食いしばり、腰を落ち着かせる。そ
れでも鋭利な眼差しは変わらない。

風は凪ぎ、木々も大人しくなっている。貴方の瞳はうっすら潤っている。

そう、何も知らないのは私の方。

貴方は怒りに囚われているのでなく、悲しみに囚われているのだ。

ある日突然抱え込まされた悲運と、夜の呪縛に太刀打ち出来ない自分の不甲斐なさとに。
それは血に飢えた浮浪者のせいだけど、私の責任もある。
悲しむ貴方を救ってあげられない。貴方はゆるゆると歩を進め、丘の縁から崖下を見下ろす。暗黒が広がっている。貴方は頷くように首を振って、顎を大きく持ち上げる。流れ星は貴方の涙のように、極光という名のヴェールに包まれる私を掠める。空が泣いている。
貴方の遠吠えが空気を切り裂き、冷たい極地の夜に反響する。
昼間、貴方は騎士団の一人として剣を振い、夜になると変身する。銀色の毛並みを持つ野獣の姿に。ライカントロープ。
丘の上のシルエット。貴方を照らし、影を生み出す私はムーン。虚空に浮かぶフルムーン。
私を憎めばいい。貴方に夜毎、見つめてもらえるならば、それでいい。私は貴方を狂わして、貴方は私を狂わせる。
月と狼男の叶わぬ恋。
冬の夜。澄んだ空気に光は強く降り注ぐけれど、貴方に想いは届かない。

第三夜『アンブレラ・ロマンス』（前書き）

社会の翳りと夜の燻み　融けゆく未来の世を馳せり／
二つの蕾は耐え抜いて　煙雨に咲いた桃花のように／
やがて花開く春が来る

第三夜『アンブレラ・ロマンス』

第三夜『アンブレラ・ロマンス』

スチームガスの覆う、白夜の夜――。

雨が音を立てて降り注ぎカーボネイトの都会の壁肌を撫でる。濡れた箇所から立ち上る煙がビル風の上昇気流に乗って出ているはずの月を曇らせていく。

摩天楼の一角、シャッターが下りた寂れた花屋の軒下で、貴方は何の気なしに屋根の隙間から曇天を見上げている。

雨は止みそうにない。立込める霧は晴れそうにない。

濡れるのを心底避けたい貴方は、雨の中に飛び込むことさえ出来ずに、居場所を隔離された嫌な気分になりながら、水滴のレースカーテンが風になびく様子をじっと息を潜めて見つめている。

水に打ち出されて、硫黄の香りが地面から噴き出してくる。この匂いを嗅ぐ度、街に巣食う闇の存在を飲まされたように胸が詰まり、靄々と不快感が渦を巻く。工場の屋根に屹立する煙突、並び立つ通気管、鳴り響く汽笛、内燃機関のシリンダーが生み出すノイズ、煙臭い都市の大気、巨窯から漂う燃焼する鉱石の薫り、毛先から滴る排ガス混じりの雨の感触、時たま吹く摩天楼風の冷気、唇を割って入って来る薄荷の苦味、渇いた舌先を刺す痛み……。

生きることを感じさせる五感の刺激も貴方にとっては憂鬱の賜物でしかない。

私もそれは痛いほどに分かる。授業中いつも、窓を眺める貴方の横顔は私に濃厚な親近感を抱かせる。きっと貴方も私と同じことを考えているに違いない。そんな予感はあったけど、言葉にする勇気はない。

だから今日も同じ一日。そんな気がしていたのに。たまたま通りかかった花屋の店先には今、貴方が立っている。

貴方は通りで立ち止まったままの桃色の傘をすぐに見つける。その陰から覗く私の顔も。他の誰かなら手を上げて挨拶でもするところなのに、二人は見つめ合い不動のまま。

傘を叩く雨音が私を急かし、立ち込める雨霧がより一層二人を孤立させる。漸く軒下に歩み寄ると、貴方は「なかなか雨が止まなくてね」と頬をかく。

やがて、貴方は傘を差して通りを歩いて行く。肩ばかりが触れたまま、私はその傍らで灰色の街に視線を泳がしながら、傘の下、そっと他愛ない話をし始める。

「今日はいつもより明るく感じる。傘のせいかな」

貴方は笑う。くすんだ通りの光景に揺れる桃色のアンブレラ。帰路の途中、確かに眩さは傘の下にあり、その日以来、私は毎日それを感じている。

時折降る酸性雨を疎ましく思いつつ、今日も貴方は傘を差している。心なしか、私との距離を縮めながら。

第四夜『待ち人は望月の夜に』（前書き）

月の傾く夜を待ち　巡り巡った日は葉月／
空虚に映える天体の　傍から出でし光の船に／
竹薮薫り　金色の声

第四夜『待ち人は望月の夜に』

第四夜『待ち人は望月の夜に』

空は晴れて、かの天体が麗しく輝く夜――。

遥か遠き天上の異星へと旅立つた、貴女。空が晴れた夜は貴女のことを思い出す。

時は八月、葉月の夜。この地を発ち、片方に浮かぶ天体を目指し、青く黒き宇宙空間へ飛び去るその後姿を、今も夜の帳の幻に見てしまふ。艶やかな垂髪。矢筋のやうに整つた翠眉、意志の強そうな眦。肌理は白絹のごとく、雪の肌に咲く丹花の唇がよく目立つ。

引き止めることも叶はず、この地でひつそりと貴女の帰りを待つ己の非力が恨めしくて仕方がなゐのです。こうして星空を眺めて居れば、地上の宝玉など、煤けた石礫と大差もない。星を纏い、かの天体の発する光――侍女の話によれば、それは太陽の光が照射してゐる所以のものだと云うけれども、直黒の空に照る御姿は、丸でこの詰らない日常に現れる貴女の姿のやうで……。

貴女が戻つてくる。その伝聞は、真のことだらうか。

見上げる空の片隅に、貴女の姿は見えやしない。動くものは、屑星の瞬きと箒星の尾。庭に植わつ樹木の葉陰に、暁光は消え、夜が訪れる。宇宙の果てに在る瓦斯雲の話を覚えて居られるか。東の空に漂う雲は、星の群れと目に見えぬ透明な気体で作られた星雲と呼ばれる瓦斯雲ではないか。語りつつ逢引を交はした宿りの森も夏風に寝静まらうとしてゐる。葉擦れ、竹の薫り、旗薄、紅葉、天の浮橋。この京の、御宮の庭の、東の涸山水、西の小滝、耳朶を打つ水簾の音、風流ある林泉、貴女は覚えて御出ででせうか。

霞色の薄闇に過ぎた別れの長大息が逆巻く。掖庭から鳴る、暇を持て余した帝の舞いの音楽が、一入侘びしめる。思い煩う葉月の夜

に、貴女は矢張戻らない。

扇で頬を扇ぎつつ、縁側で転寝をしてしまつたことに気がついて、侍女の歓声に何事かと瞼を開ければ、涸山水を照らす、天上からの光明に魂消て眼が眩む。宙船を降りて来るのは羽衣を纏った遣いの列。やおら立ち上がり、寝惚けて覚束ない足取りで侍女の肩を掻き分け、光の襖に駆寄ると、遣いに導かれ、しずしずと出でる十二単の彩色豊かな風采。思わず頬が緩む。

貴女は此方の顔を見て、嫣然として会釈する。雅な船を出、遣いの隊列を潜り、面映く目を伏せながら歩み寄る貴女の手をとり、久方ぶりの再会に熱涙下れば、如何にも気恥ずかしい。貴女の帰還を奉迎する、侍女の歓声。

「よくぞ、戻った。かぐやよ」

抱擁しながら、見上げた空に、かの天体の碧い光。月の都の夜は更けゆく。

第五夜『贋物と一角獣』（前書き）

摩天楼の崩落を　あらわす白きユニコーン／
空想さえも仮初の　苦悩と希望の前衛芸術／
所詮　現世はイミテーション

第五夜『贋物と一角獣』

第五夜『贋物と一角獣』

警笛が谺する摩天楼の夜――。

何処かで硝煙。男たちの跫音。三十五階建て、保険会社の建築物には液晶画面。映る女の顔は、芸妓。粉の噴いた肌がてかてかと、ａｓｐｅｃｔ比四対三のでぃすぷれいに表示されて、彼女は地上を瞰しながら、声を出して笑っている、宣伝用に生まれた仮想知能。でぃじたるあにめーしょん。贋物の大和人。

埃を纏った風を受け、貴方は黴臭い――そんな気がする。現に、数値は一平方糎のうち十ころにーが現存、全体の約三十厘――ふろあーの窓辺に佇んで、指先をｎｅｏｎｌｉｇｈｔｓに翳しながら動かない。足元を瞰せば、誰が置いたか、屋台のなぷきんで拵えた白い一角獣。拾い上げた貴方の指の間で、一角獣の半身は灰色にくすんでしまっている。詼謔的な話を好む屋台の主人は饂飩を勧めてはくれても、貴方が何者かは教えてくれない。初めて会う店主と客だもの、名前も素性も知らないことが当たり前。饂飩の器を受け取って、離れていく貴方の背中を見る、あの眼。何か言いたげだったけれど。

拳銃から棚引く硝煙。地面から噴き出る排気。饂飩の湯気。白く霞む。どれもこれも。真実を覆い隠して。貴方は人間。死んでいった仲間達の偽証は忘れてしまいなさい。貴方は造り物。複製――れぷりかんと。

拳銃から放たれた銃弾は、仲間の胸を貫いて壁に埋まっている。床で事切れ、ｓｃｒａｐとなった男もれぷりかんと。貴方もわたしも、れぷりかんと。屋台の主人は……れぷりかんとではない。本当かしら。貴方がそう思っているだけではなくて。

窓の外にはｎｅｏｎｓｉｇｎ。光に抱かれ、駆け上ってくるのは一頭の一角獣。窓を蹴破り、一角獣は摩天楼を駆け巡る。ａｓｈｃｏｌｏｒの町並から、ｅｖｅｒｇｒｅｅｎの草原を訪れる。けれどもそれもすべて贋物。空想のれぷりかんと。窓硝子を粉々にして、自由を得た贋物の貴方とわたしは、贋物の一角獣と共に地に落ちる。濡れたａｓｐｈａｌｔの上は冷たい。縺れ合う様にして横たわる二人は、起き上がらぬまま、皓く輝く一角獣の夢を見る。

貴方の名前はデッカ……。その名前は贋物ではない。貴方はれぷりかんとである前に貴方というｏｒｉｇｉｎａｌ。そんな戯言。大和女の高笑いが途絶え、馬の嘶きに変わる。でぃすぷれいに映し出されたのは、眠る貴方の横顔で、ａｓｐｈａｌｔには角の折れた一角獣。

真贋の境界は移ろい易いもの。けれど、貴方が貴方でなくなる訳じゃない。

第六夜『ジョバンニの夢』（前書き）

幼き頃の悲しみが　星を数えるたび燃える／
旅立つひとに眠るひと　見送るひと　目ざめるひとに／
銀河鉄道は夢乗せて

第六夜『ジョバンニの夢』

第六夜『ジョバンニの夢』

星が瞬く祭りの夜――。

かつて天気輪の柱が聳えていた丘の草地に貴方は立つ。銀河の祭りは今宵で何度目か、数え上げることは天井の星を数えることにも等しくて、唯唯貴方は自然の星図に目配せをする。

祭りが来る度、貴方は遠い彼の日に消えた友人を星空に探し、蠍の炎やプリオシンの端っこに、あるいは南十字の切っ先に記憶の頁を捲り出す。その隣に山高帽の男が立つ。

「貴方も誰かをお探しで？　私も空に消えた友人を探しているのです。名前はハリー。今は何処にいるのやら」

プレアデスを纏い黄道を抜け、アルゴオ船の傍を並走しながら祭壇に辿着いて、たとえば南国の巨嘴鳥や白鯨やカメレオンたちと今頃は過ごしているのかもしれません。そう話す男に幼い頃、夜の軽便鉄道で会った男の面影を重ねた貴方は涙ぐむ。

「人違いをしてらっしゃる。貴方とは初めてお会いしますが」

空に燈る虹色の三角標。濃い鋼青の空。瞬く燐火。そう、いつかの金剛石をばらまいたような光景を貴方は見上げる。それでもいいのです――。貴方の呟きに男は押し黙る。

「おや、ハリーが帰ったようです」

男の指差す先に貴方は目を向ける。カシオペアの先から一筋の光が貴方目掛けて飛んでくる。青くかすんだ星、橙にぼやけた星、白く煌めく星に囲まれ黄金色の鋭い光がやって来る。まるでそれがマグネシヤの花火も三角標の燈火も吹き消そうとするかのように風が吹き、吊鐘草の花々が揺れ松や楢の木々がざわめく。

「はぐれてしまった私を迎えに来たのです。もう随分経ちました。でも私はハリーのことを忘れませんし、ハリーも私を憶えていてく

れるのです」
　男はそう言うと山高帽を脱ぎ丁寧にお辞儀をして、現れたハリーの光に包まれていく。
「貴方の御友人は流星になったのかもしれませんね。きっと貴方の御友人も貴方のことを……」
　男の声が消えていく。光は丘を迂回して再び南天に去っていく。街からハレルヤハレルヤとケンタウルのお祭の囃子が聞こえてくる。男はいない。でも眩い燐光は変わらず頭上に広がっている。
？ジョバンニくん。成長しましたね。マジェランもプレシオスも生きていますよ。貴方の心に、この宇宙に？誰かの声がする。併せて銀河ステーションの案内が聞こえてきそうで、貴方は父上から貰った懐中時計を確認すると来た道を引き返す。
　烏瓜を川に流すのです。今年も来年もずっと。貴方の呟きに反応するように、一点の星がゆっくりと瞬く。

第七夜『綺劇』（前書き）

舞台を下りる術がなく　惑わしだけを糧として／
永劫生ける奇術師は　タネも仕掛けも手放せぬまま／
閃光のなかを落ちていく

第七夜『綺劇』

第七夜『綺劇』

観客のいない劇場の夜――。

イリュージョン。貴方はそれを魔法と呼び、別の貴方は奇術と呼ぶ。傍らの台に置かれた琥珀色の球。琥珀どころか水晶でもない、着色しただけの硝子球を手に取ると、貴方は闇に翳し、掌で周囲を煽ぎ始める。呪文を唱えるように眼力を送り、白熱灯のスポットライトを浴びた、ステージの真ん中で、今宵もひとりショーを始める。

硝子球を天井に投げると、ぱぱっと黄金の球面に光が迸り、やがて貴方の手元に再びそれが落ちてくる頃には、両掌でも持て余すほどの大きさがあった硝子球は何処かへ消え、貴方は降りてきた静寂を勢いよく掴む。貴方は諸手を広げて、歓声を浴びる。無人の観客席から怒涛のように浴びせられる拍手喝采を浴びる。貴方の耳にはそれが聞こえる。

貴方の背後を遮断していた幕が上げられ、装置が現れる。今宵最大のショー。突き出た双極から電流が舞う。ニコラ・テスラが生んだ奇抜なるトリック装置。貴方はカプセル状の装置の中央に立ち、一礼をすると、観客席を見渡す。座席は無人ではない。人ならぬ、幻影たちが皆、射光の悪戯めいた靄のような手を揺らめかせている。すべてが客。すべてが幻影。

装置が作動する。フランケンシュタインの怪物を生んだ雷鳴よろしく二本の稲妻が双極から貴方の体へ降り注ぐ。閃光のなかで、一度だけ瞬きをすると、貴方の体は途端に立ち消え、カプセルは蛻の殻となる。ざわつく幻影。再び、静寂。

観客席の後方から貴方が現れる。通路を歩いて、ステージに飛び乗ると、丁寧にお辞儀をして、奇術は完成する。惑わし（プレステージ）を成し遂げた貴方はそのまま観客席に腰を落ち着かせると、

舞台袖から別の貴方が登場し、脱出マジックを始める。そしてお決まりの？瞬間移動？。電弧が生まれる度に、貴方は生まれ、幻影が生まれ、観客席は次第に埋まっていく。

瞬間移動装置の生み出す幻影。ドッペルゲンガー。瞬間移動ならぬ分身発生装置。決して人の前には出せぬ、唯一無二のトリック。偉業（プレステージ）。それを手に入れた貴方は今、存在そのものが魔法と化し、奇術と化した。それでもわたしには、劇場に溢れ返る貴方の恍惚を奪うことは出来ない。けれども、名声ではなく、手品師としての生涯を欲しても、人の目に晒されぬ奇術は自慰の何物でもないのです。貴方の行く末は硝子球が教えてくれることでしょう。

床下で砕け散ったまま、誰にも気づかれぬ硝子球が。

第八夜『慟哭のカテドラル』（前書き）

醜き歴史に風吹けば　悪魔を弔う鐘が鳴る／
救えぬ罪は醜さか　抗えぬ罪は運命か死か／
嘆きを諦め　皆踊る

第八夜『慟哭のカテドラル』

第八夜『慟哭のカテドラル』

鐘楼の泣き咽ぶ夜――。

血に染めた大地は紅で、まるで訪れた夕暮れを一滴残らず吸い取ってしまったかのように、辺りは既に宵闇の色。風見鶏はよく回り、聖者の行進は帰途へつく。錆付いた十字架の下で、醜い顔を覆い隠した水草のような前髪をかき乱し、貴方は地下隧道を駆けていく。向かう先は恋人が連れ去られた処刑場。

寺院の地下を這う隧道の闇に、魔女の泣き声、舞曲の旋律が、こびりついて離れない。自分も、恋に理性を奪われた男たち――つい先ほど貴方がその手で大聖堂の屋上から突き落とした司教と同じ――の一人なのだと、悪魔が囁く。貴方に彼女は救えない。醜さしか持たぬ貴方は何の力にもなれぬまま、彼女が魔女狩りの犠牲になるのを、埃や泥に塗れた前髪越しに、民衆に紛れて、黙って見ている他ないのだと悪魔は哂う。

押し迫る時間とは裏腹に、貴方の足の力は次第に弱まっていく。元から丈夫でない骨は今にも折れてしまいそうで、息も続かない。爪先が縺れて、貴方は隧道の床の上を転んで、痛みに呻く。

放浪の民ながら、美貌に恵まれ、慈悲と優しさを持つ、彼女。生まれながらにして歪んだ骨格を覆う、醜い顔と小さな背を持ち、弾圧に虐げられてきた貴方を、唯一守ってくれた彼女。出逢った瞬間から、憧れは恋へと変わり、これまで叶う事のない思いを燃焼させてきた貴方。この身を滅ぼしてでも、彼女を救いたい。貴方は歯を食いしばり、血を吐きながら、願う。

時間が来る。静まり返る広場に鐘の音が響く。嗚咽に似た、震える音。彼女は処刑され、亡骸は敷地内の共同墓地に埋められる。大

きく開いた穴の中、事切れた彼女はごみのように投げられ、穴は塞がれる。貴方は分厚い壁越しに、微かに処刑執行の警鐘を聞きながら、冷たい隧道の土の上で動かなくなる。

永い時が流れ、墓地の土が隧道に雪崩れ込む頃、二人の白骨は深い地中で巡り合う。重なり合い、縺れ合い、削り合うように愛し合い、やがて果てると、その名残である骨髄の滓から、黒い影が堆く積もった土から這い出してきて、今夜もまた鐘楼の壁を駆け上っていく。

悲しい眼をして、醜い顔と美しい顔が綯い交ぜとなった上、色という色を失い、ただ果て無き闇の手触りしか持たぬ表情に、細い笑みを浮かべる悪魔が、町を見下ろしながら、大聖堂の鐘を衝く。

夜に染まった大地は暗黒で、民衆を夜な夜な狂舞に誘い込む、死出の舞曲を奏でながら、ノートルダムの鐘が鳴る。

第九夜『夢幻泡影』（前書き）

翠玉の泡立ち上り　世界の果てが浮き沈む／
叶わぬ恋は泡沫の　海原に消ゆ混濁の夢／
声は海鳴り　聴けよ鎮魂歌

第九夜『夢幻泡影』

第九夜『夢幻泡影』

潮風の靡く、愛しきひとの末期の夜――。

今宵、彼はわたしの中から永遠に消えてしまう。そうなる前に、魔法の呪文を唱えよう。お母様、貴女から教わった旋律に、彼の祖国の言葉を乗せて。この歌声は、広々とした晦冥の海に響き渡り、やがて彼に届くかもしれない。ただその一抹の願いに想いを寄せて。

エメラルドの海が、今はダークオパールの輝きを発している。時間がない。ベッドに横たわる彼と、見守る家族と家政婦たち、婚約者候補の群れ。誰もが手にしたハンカチーフは純なる水で湿っているけれど、わたしの流す涙には到底及ばないでしょう。わたしの涙で、病に魘される彼を救ってみせる。今こそ、病床で苦しむ彼を、潤いの満ちた世界で目覚めさせてあげよう……。

お母様。この決意が禁じられた感情、禁じられた行為であることは分かっております。わたしの一抹の想いが、この海を荒れさせ大地を飲み込もうとしても、海底の宮殿や、我が故郷の町並みが、わたしの浅はかな好奇心で、崩れ去ろうとしても、わたしはこの決意を無駄にすることは出来ない。この想いを魔力に変え、この身を捧げたいと思った方に捧げるのは無様なことでしょうか。わたしと彼の間には、この海原と大地を隔てるよりも深い深い溝が、高い高い防壁がある。それを乗り越えられるのは、わたしの末期に零れる涙の一滴だけ。

お許しください、お母様。母なる海の、大いなる神よ。

わたしは今宵、禁忌を犯し、たったひとり彼のためにこの身とこの存在を捧げようと思うのです。母なる海の力を借りて、体内に眠

る白銀の波濤と黄金の微蕩いを呼び起こし、狂おしき感情の瀞みと時化を抑え込みたいがために。そんな愚鈍な娘をお許しください。悠久に流れる時を犠牲にしても、わたしと彼が幸福に包まれながら暮らせる、夢の世界を築くために……。

やがて、丘の上の屋敷に彼の呻きが響き渡る頃、わたしは手を組み、祈る姿勢のまま、尾で波をつくる。波は渦となり、その渦がわたしの体を飲み込む。わたしが流した最後の涙を小壜の中に封じ込め、漁師が海岸に打ち寄せたそれを彼の部屋まで届ける。霊薬となったわたしの涙を、家政婦は彼に飲ませる。

海が大地を飲み込む。丘を、屋敷を、世界を。

すでに苦痛から解放され、息を引き取った彼の見る夢の中で、わたしは彼と幸福な時を過ごしている。二人は夢の中で混じりあいながら、宝石の煌めきを放つ、幾億もの泡と幻になって。

第十夜『虚無が目蓋の』（前書き）

一夜の終わりは虚無の果て　或いは永遠の夢散歩／
柱時計が谺する　目眩と幻聴　輪廻の内に／
夢か現か　人世の終わり

第十夜『虚無が目蓋の』

第十夜『虚無が目蓋の』

柱時計の音が鳴り止まぬ、混沌の夜――。

此處は虚無。貴方は居ない。貴方が居るのは目蓋を閉ぢた暗澹とした闇の奥深く。貴方は其處で何をしていらつしやるのかしら。此方に遊びに來てくれればいゝのに。眞夜中は無音。扉一枚で隔たれた廊下には、跫音も聞こえない。格子？の向かうからは、夜烏の打ち羽振く音も、梟の聲も聞こえない。まるで此處ら一切が冥夜の底に落ち沈んでしまつたかのやう。

若し貴方の存在を初めから感じてゐなければ、此の寂しさも抱かずに濟んだのに、一度、目を瞑り、貴方の姿を見つけた時から、あたしは呪縛から逃れられない運命に嵌つてしまつてゐる。貴方が誰なのか、實際は何處に居るのか、何故目蓋の裡に其の端正な笑みばかりが殘つてゐるのか、さつぱり思ひ出せない。記憶がない。憶えがない。何處かで出逢つた心地もなく、實在するといふ確證もない。なのに思ふ心だけは頻りにあたしを追ひ詰めていき、今日も泣いて縋るのです。朧氣な意識で、鮮明な貴方の姿に。

何時から貴方は目蓋に御住まひになつてゐたのか、其れすらも定かではございません。此の鎖された部屋で目覺めた時から。百年、千年前、世に生を受けるずつと前から。或いは數秒前から。

貴方は何者なのか。夜毎、自然と眠りに落ちる間際の縁にしがみ付きながら、考へてもゐます。失つた記憶の中の人。前世の愛人。妄想の産物。たゞ、腦髄の幽靈、そんな言葉が過ぎつて、ふと、其れが最も近しいものではないかと思つてしまふのです。あたしは自分の腦髄に騙されてゐるのではないか。己が生み出した殘留思念で孤獨を紛らはしてゐるのではないか、と。

時折、壁越しに御聲が聞こえてくるのは幻聽でせうか。間近で聽

いた憶えもないのに、貴方の聲だと直ぐ分かる。其れは極めて不思議なこと。氣が違へてゐると思はれても仕方がありません。

あたしが匿はれた此の部屋は、狂人の集まる牢獄なのでせう。晝間、何處と無く響いてくる野蠻な聲は、到底貴方のものではない狂人の雄叫び。あたしもその一人。慥かに悲鳴を上げたくもなりますが、貴方を思ふ一心で今は解放される日を待つてゐるのです。

貴方は誰。あたしは誰。

ブウゝ――――――ンゝゝ――――――ンゝゝゝ……。

お兄様お兄兄兄兄様。今夜も目蓋の裡に現れてあたしを慰めて下さいな、お兄様ア――ッ……あたしは氣違ひぢやありません。

ブウゝゝ……ンン……

柱時計の音が鳴り止まぬ、混沌の夜。

第十夜『虚無が目蓋の』（後書き）

感想・評価お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8045i/

掌篇集『千字一夜物語』

2011年10月2日01時34分発行